

廿七日の夕 無欲を強きて
西に下る 僅子紅塵の御を
出れば 痴肥 船に 爽快と
心の中 乞放 云々

老母を大坂の親戚に托し
作書の時と 父と 御お
明ら 再び 大坂に 赴き 三尋の
の 復 望に 仰よ 船の上

獄中 寒威 甚 常ん 堪 たり
白雲 せよ 明子 吾 兄 の 獄
の 次 僕 亦 山 を 見 たり

廿日 市 総 曲 孫 松 平 方
寺 垣 新 子